

◆私立大学3年生の斎藤菜穂さん(21)は昨秋から毎週、神奈川県内の共働き夫婦の子育て家庭を訪問している。4歳の子どもを保育所に迎えに行ったり、入浴や夕食などを手伝ったりするためだ。就職活動に取り組む中で「自分は将来、仕事と家庭を両立できるのかな」との不安がよぎった。仕事と家庭を両立する夫婦のリアルな日常に接して「働きながら子どもを育てる姿が、とても楽しそつに

時流 地流

キラキラ見えました」。

◆この事業は、大学生が子育て家庭を訪問し、家事や育児の手伝いながら、大学生に仕事と育児の両立を体験してもらつ「ワーク&ライフ・インターン」。社会起業家の堀江敦子さんが株式会社のスリール(東京・新宿)を設立し、2010年秋から事業を始めた。「共働き家庭へのホームステイ」で、首都圏の家庭を中心に約150人の大学生が体験している。

◆1人の女性が生涯に産む

子育て家庭でインターン

と推計される子どもの数を示す合計特殊出生率は、11年に1・39人。大都市圏ほど出生率は低い。待機児童問題など課題は残るが、子どもの医療費助成や保育所増設など、政府や自治体の子育て支援策は少しずつ充実している。民間でも育児休業などの子育て支援制度は整いつつある。それでも、少子化の流れを転換させることはできない。

◆スリールで共働き家庭の子育ての現場を体験した大学生からは「自分も仕事と家庭を両立したいと思えた」「『なりたい自分』が想像でき、就職活動が楽しくなった」などの声が寄せられている。

◆企業の設備投資や個人消費が増えるかどうかは、将来の総需要や賃金が伸びるのかどうかの予想に左右される。少子化対策でも「子どもを持つことの楽しさと苦勞を体験すること」で、子育ての「予想」に現実味が増すはず。堀江さんは「社会に出る前の学生が子育て家庭を体験することが、次の世代のキャリア教育にもつながる」と強調する。保育所増設や手当・給付金の拡充とは異なる、新たな視点の少子化対策かもしれない。(森川直樹)